

# 戦争博物館から戦争を考える

社会学者 古市 憲寿 氏

## Part1：講義

### はじめに：なぜ「戦争博物館」なのか

古市と申します。きょうはよろしくお願ひします。

きょうはどういう話をしようか迷ったのですが、8月15日も近いということで戦争博物館の話、戦争の話をしていただきたいと思います。

初めに自己紹介をしておきたいのですが、1985年生まれ、今29歳です。2011年に『絶望の国の幸福な若者たち』という本を出しまして、そのころから「何か若者に詳しそうな人」といろいろな人が勘違いしてくれて、若者のことを知りたい大人たちの講演会であるとか、そういう場所に呼ばれる機会がすごく増えました。

そういう経験をもとにして、最近、『だから日本はズレている』という本を出しました。これは日本の括弧つきの「おじさん」を分析した本です。「おじさん」たちは、会社の中にずっと居続けてしまっていて、世間の価値観からどんどんずれていってしまい、社内の論理だけを考え過ぎてしまうのではないかと。そういう括弧つきの「おじさん」の存在を前提として、日本社会はこれからどうなっていけばいいのだろうか、ということを書いた本です。

このように、若者であるとか、若者から見た日本社会論というものを基本的にずっと本としては出してきているのですが、1冊だけちょっと違う本を去年に出しました。それがみなさんに事前に読んでいただいた、『誰も戦争を教えてくれなかった』という本です。これは一言で言えば、戦争博物館の本なのです。あまた戦争についての本はたくさんありまして、戦争体験記であるとか、戦争を分析した本であるとか、もしくは集団的自衛権であるとか、イラク戦争とか、現在の戦争を分析するとか、戦争に関する本はすごくたくさん出ているのですが、戦争博物館に関する本、しかもいくつか



の戦争博物館を比べる本というのがなかったので、自分で書いてしまったというわけです。

実はもともと戦争博物館のことに興味があったわけはありません。戦争自体にも特に興味はありませんでした。それがなんで書こうかと思ったということから、きょうの話を始めたいと思います。

2011年のお正月に、たまたま友だちとハワイに行っていたのです。ハワイに2週間も行ってしまったのですが、僕は海があまり好きではなくて、海水に入らなかつたのです。海に入らないとなるとハワイって本当にやることなく、買い物もセールとかもやっているんですけど、そんな別にパツとしたものがあるわけでもないじゃないですか。というわけで、どうしようかなというので『地球の歩き方』をめくっていたら、ハワイにパールハーバーがあるということを思い出したのです。当然、「パールハーバー」の名前は知っていましたが、真珠湾の攻撃があったという事実は当然知っていたのですが、実際に行ったことはないのです。行ってみたいかなと思って、気軽な気持ちでパールハーバーに行つたのです。

そうしたら、その空間がすごくおもしろい場所だったので。そして、僕にとってはすごく興味深い場所だったので。というのも、僕が「戦争に興味がない」と言っ

ても、日本で教育を受けてきていて、その中で戦争というものはすごく悲惨であって、繰り返してはいけなくて、かつ、すごく重いこととして日本では教えられたりであるとか、メディアで流されることが多いと思うのです。けれども、アメリカのパールハーバーの「アリゾナメモリアル」は違っていたのです。どういうことかということ、非常に明るい場所だったのです。

「アリゾナメモリアル」は沖合に沈んでいる艦隊があって、その上に建っているミュージアムなのです。そこまではクルーザーで行くのですが、ハワイの海のクルーズなので楽しいですね。よその子供たちと一緒に船で行ったのですけれども、子供たちはみんな喜んでいましたし、同乗していたアメリカ人もこのクルーズを楽しんでいました。また、たまたま僕が乗ったクルージングの船には、当時の兵士の遺族の方々が乗っていて、それをガイドのおじさんが紹介したところ、みんなで拍手して盛り上がるということが起こりました。こういう文化は日本とは違うな、ということを実感しました。

そして、パールハーバーの「アリゾナメモリアル」は、日本とアメリカの歴史に関してはある種中立的に描いているのですけれども、そのメモリアルの主眼が犠牲になった兵士たちであり、彼らをたたえることなのです。その犠牲になった兵士たちの存在があるからこそ、アメリカのあの戦争における勝利はあったという形で、ある種前向きでさわやかな勝利を祝う場所なのです。でも、これはある意味で当たり前であって、アメリカというのはまだ戦争をし続けている国なのですね。戦争を続けている国であるから当然、戦争反対であるとか、戦争を二度と起こしてはいけないということは言わないわけです。このことが僕にとっては非常に驚きだったのです。アメリカ側に立てば当たり前の視点ではあるのですけれども、同じ戦争、特に第二次世界大戦というものであっても、国や場所が違えば、これだけ見方が変わるのだな、ということがとても印象的でした。

たまたまその翌月、中国の南京に行く機会がありました。南京という場所は、南京大虐殺、南京事件が起こった

場所ですけれども、その南京という場所もまたアメリカとは違う形で、戦争の記憶を残している場所でした。その博物館にはいくつかの建物があるのですが、当時の日本の新聞等を展示しながら、日本がこれだけ騒いでいた、日本にこれだけ残虐なことをされたということを展示しているのです。

何よりも目立つのは、「30万」という数字にすごくこだわっていることです。まず、入り口には、犠牲者が30万人だったということを示す巨大なモニュメントがあり、「30万」という数字を12ヵ国語ぐらいで表記しています。かつ、博物館内の石の数も30万個であるそうです。博物館内にある平和を願う女神の像も高さ30mであったりとか、とにかく「30万」という数字にこだわっているのです。

歴史を正しく伝えるであるとか、証言者の声を伝えるという思いもたぶんあるとは思いますが、プロパガンダ色が非常に強い場所でした。どういうことかということ、中国のほかの博物館にも共通して見られる傾向なのですけれども、「日本にこんなにひどいことをされた。でも中国共産党の寛大な心によって、今日中関係は非常に友好である」という、ある種の共産党のプロパガンダとして使われている場所だったのです。

また、ちょっとおもしろかったのは、最後に「弔いマシン」というものがあつたことです。ボックス型マシンで、日本語、中国語、英語が選べて、日本語を選ぶと「犠牲者を弔う」というマークが出てきて、どのようなものをささげたいかということを選んで、OKを押すと、「あなたの思いは弔われました」という表示が出てくるのです。館内では、日本のことを憎んでいる展示がありながらも、こうやって日本語で弔いマシンで弔いすることもできるのです。その他、ビジターセンターの日本語訳が「お客様センター」であつたりとか、そういうちくはぐさみたいなことをここで感じました。

## 物語のない広島

またその翌月、3月に広島に行ったのです。広島の前

爆ドーム（広島平和記念碑）という場所です。広島という場所は日本の中でも珍しく、戦争の被害をそのままの形で残している数少ない戦争遺跡であるのです。けれども、その博物館は特に物語がなかったのです。アメリカでは非常に分かりやすい物語がありました。つまり、「犠牲になった兵士によってアメリカは勝利した」ということです。中国であれば、先ほど言ったような共産党の物語があります。でも広島に関しては、物語というものがなく、ただただ悲惨さを強調するだけということが印象的でした。

詳しくは本に書いたのですが、展示はそもそも広島市の歴史から始まるのです。だから戦争の加害とか、被害とかそういう戦争に関する責任問題ではなくて、ただ広島で起こった悲惨なことを表現しているわけです。広島には「過ちは繰返しませぬから」という碑がありますが、あの碑については「日本が加害者なのか、被害者なのか、主語は誰なのか」ということが批判されますけれども、まさにそれを裏打ちするような博物館でした。

また、広島博物館については、原爆被害に遭った子供や大人たちの皮膚がどろどろになった人形が展示されているのですが、あれを撤去しようという運動があります。ショック療法みたいに、あの姿を見せてどうなるのか、という反対の声が上がっているからなのですけれども、もしもその人形さえもなくなったら、ただひたすらに悲惨なことを強調する場所に広島はなると思います。

この3つの国の3つの博物館をたまたまめぐることがあって、同じ「あの戦争」を記憶するはずの場所であっても、戦争の残し方というものはまるで違うな、と感じました。そして、ある種当たり前ではあるのですが、そのことがおもしろいというふうに思ったのです。同じ第二次世界大戦という世界中で戦った戦争であっても、一方にとっては「よい戦争」であったりするわけです。

特にアメリカにとっては、あの戦争は「よい戦争」なのです。本土空襲にも遭っていないですし、戦争によって景気がよくなって、アメリカという国はあの時代に栄

えたわけです。その後起こるベトナム戦争とか湾岸戦争に比べて戦費もそれほどかかっていませんし、自分たちの国のダメージはほとんどなかったにもかかわらず、それで経済復興したという意味で、あの戦争は非常に「よい戦争」として記憶されているのです。

一方で、日本では当然「悲惨な戦争」として記憶されているわけです。「あのような戦争は二度と起こしてはいけない」ということが、いまだにトラウマのように日本人の心に張りついています。一方で、中国では、「悲惨」ということも当然強調されるのですけれども、それよりも政治の道具として、あの戦争は記録されていました。こうしたことから、はたして各国は「あの戦争」をどう残しているのか、ということをお調べになったのです。

## 戦争社会学

こうやっていくつかの戦争に関する博物館をたまたま見たことによって、ほかの博物館を見たいくなったのです。というわけで、ほかの国の博物館にも行ってみました。ちょっとまじめなことをしゃべっておくと、「戦争社会学」という学問分野が今ちょうど注目を浴びているのです。社会学というのはもともと社会のことを研究する学問ですから、戦争については従来はあまり対象になってこなかったのです。なんでかと言うと、戦争というものは社会の状態から見て非常にまれに起こる非日常的な出来事ですから、社会学の対象にはならないと思われてきたのです。でも、それがこの20～30年で状況が変わってきました。

まずひとつが、「メモリースタディーズ」とか「メモリアルスタディーズ」と言うのですが、記憶の研究というものがこの30年間ぐらいですごく勃興してきました。直接の契機は、戦争経験の風化、すなわち戦争体験者がどんどん亡くなっていくという状況と非常に密接に関係しています。この30年ぐらいで、どんどん「あの戦争」の経験者が亡くなっていき、そうした中で「あの戦争」をどう検証すべきなのかということが、日本のみならずこの国でも問題になってきたのです。その中で記憶とい

うものをどう考えればいいのか、そして記憶と忘却という問題、記憶の研究がすごく注目を浴びました。

加えて、これは観光社会学という分野とも関係してくるのですけれども、この10年ぐらいは「ダークツーリズム」研究というものが流行しています。東浩紀さんがここにいらしたときもたぶんしゃべったと思うのですが、観光の一分野として、アウシュヴィッツであるとか悲惨な場所、人類が残した負の遺産みたいな場所を研究しようということが盛り上がっています。実は「ダークツーリズム」は特別な観光ではないというか、そもそも観光というものは非日常を求めて人々が遠くに行ったり海外に行ったりするものですよね。ですから、死のおいを感ぜさせるようなアウシュヴィッツであるとか、そういう場所は実は観光地としても非常に納得できる場所であるということで、ダークツーリズム研究というものが最近注目を浴びています。そして、先ほどお話ししたように、異常な状態としての「戦争」を対象にするのではなく、戦争をきっかけに社会構造がつくられることもあるという立場に立って、社会学の対象にもすべきではないかという「戦争社会学」という議論がこの数年、日本でも盛り上がっています。

また、日本の戦後の社会構造というものは、戦時中に結構つくられたのではないかという議論があります。1945年に日本は生まれ変わった、と丸山眞男等は言っていて、そういう議論が一時期盛り上がった時代もあったのですが、実はよくよく見てみると、日本は別に1945年で完全に断絶しているわけではなくて、戦前と戦後というものは結構連続しているのです。つまり、戦時中につくられたさまざまな制度を戦後は継承しているのです。

よくよく考えてみたら、戦後の経済成長というものも、ある目的のために国民が一丸となって、ある意味で私生活を犠牲にしてまで国のために経済成長するということは、戦争とも非常に似ているわけです。戦争中は、敵の国を滅ぼす、敵の国に勝つという目的で、日本国民が一丸となって戦闘機をつくったり、兵士になったりしたわけ



です。つまり戦争中とある時期までの高度成長期というものは、実は国の形というものは似たりもしているのです。そうだとすると、戦争だけを特別な事象として考えて本当にいいのかどうか。もしかしたら戦争と戦後というものを連続して考えた方がいいのではないかという考えのもと、戦争社会学という議論が最近注目を浴びているのです。

その中で僕が注目したのは、国立の戦争博物館というものです。国立というのは、つまり国家というものがいかに第二次世界大戦を、あの戦争を記憶しているかということでもあります。ですので、国立の戦争博物館を見ることによって、ある意味でその国の形というものが分かるのではないかと思ったのです。というわけで、いろいろな国に行ってきました。

## 観光地としてのアウシュヴィッツ

2012年の夏にはアウシュヴィッツに行ってきました。当たり前のことですが、アウシュヴィッツという場所はすごい観光地なのです。日本のドキュメンタリー番組では、曇り空の中を暗い顔をした俳優さんが歩いていく、みたいなシーンが切り取られると思うのですが、実際のアウシュヴィッツという場所は、世界遺産にも認定されている、外国からも人がたくさん訪れる観光地で、年間140万人が来場しています。特に夏のポーランドは気候もいいですから、人がたくさんやってくるのです。



というわけで、「死の工場」であるとか、ここで何10万人も殺されたというイメージとは裏腹に、ある種俗世的な場所になってしまっているわけです。僕が行ったときも空は晴れていて、ガイドさんの後に人がずらずらついて行くという感じの場所でした。さすがに場所が場所だけあって、みんなが騒いでいるということはないのですけれども、僕のイメージに中にあったアウシュヴィッツとは違うな、と思いました。

アウシュヴィッツは、日本からだ結構行きづらい場所なのです。日本からだフランフルトかヘルシンキに行って、そこからポーランドのクラクフという町まで行きます。クラクフという町はポーランド第2の都市ではあるのですけれども、基本的にアウシュヴィッツに行くための拠点としての役割を果たしている町です。そこに来る観光客はたいていアウシュヴィッツへ行くのです。つまり、アウシュヴィッツが重要な観光資源になっているのです。そして、アウシュヴィッツという場所はショッピングモールや教会とも隣接しています。つまり、アウシュヴィッツの収容所は別に何も無い荒野につくったわけではなくて、もともと村があったところにつくられたわけなのです。そもそもドイツの強制収容所は、線路がないと囚人を運べないので、完全に人里離れた場所ではなくて、線路が通っているぐらいの地方都市であることが多いのです。アウシュヴィッツも、収容所の敷地以外には昔も今も人が住んでいます。当然生活するための施設、たとえば、ショッピングモールとか教会とか極めて日常的なものが周りにあったりするのです。

このアウシュヴィッツの博物館は、ほかの博物館と比べて「残す」ということに執着した場所だと思いました。1995年にこの博物館はできたのですが、そのころから館内の展示はほとんど変わっていないそうです。たとえば、IT技術とか最新技術もほとんど使われていないのです。最近の博物館だったら、スマートフォンを展示物にかざすと、ARで展示内容が見ることができるとか、情報が見れるということもありますけれども、そういうことが別にあるわけでもなく、ただ昔の古典的な博物館の

ようにガラスケースがあり、その中に物が飾ってあり、それを見ていくというかたちの、非常に古典的な博物館でした。

一方で、残すことに対してはすごく気を使っている場所なのです。たとえば、アウシュヴィッツを取り囲む金属の塀は、最新の技術を使って、なんとか当時のまま残そうとしています。よくメディアに出てくるような大量なユダヤ人の靴とか眼鏡も、なんとか当時の姿のまま残そうとして、さまざまな取り組みがなされているようです。このように、ありのままを残そうとするような博物館という点が印象的でした。

アウシュヴィッツについてもうひとつおもしろいなと思ったのは、普通の展示ツアーで回ってしまうとそこは飛ばされるのですけれども、各国の歴史を展示する施設があるのです。アウシュヴィッツに連れて来られたユダヤ人はポーランド人だけではありません。ヨーロッパ全体の12カ国ぐらいから連れて来られたのです。そこで、各国ごとに展示用の建物がほしい1棟ずつ割り振られていて、その建物の中で各国ごとの展示がされているのです。フランスは現代アートを使ってホロコーストの悲惨さを訴えたり、オランダはアンネを使っているとか、各博物館がお客さんを楽しませようとする気概みたいなものが感じられました。

## 戦争がタブーではないベルリン

その後にドイツのベルリンにも行ったのです。ドイツのベルリンという場所もおもしろい場所、ここは街中に敗戦の記憶がたくさん立ち並んでいる場所なのです。たとえば、旧ソ連軍が建てた「勝利の碑」が、まだベルリンには残っています。つまり、街中に海外の人が建てていった勝利の碑が残っているのです。こういう考え方は日本人にはあまりないと思うのです。

それだけではありません。ドイツのベルリンの町を歩いていると、敗戦の痕跡をたくさん見つけることができます。たとえば、シーメンスという企業の本社に戦争の犠牲者を弔う碑があったり、戦争のことを想起させるよ

うな碑が街中にあふれています。

ベルリンでは国立歴史博物館にも行ってきたのですが、その中で「ナチス」のことを特別な時代としては扱っていなかったのです。よく日本で言われているのは、ドイツはナチスというものを完全に切り離して、ナチスが全部だめだったのだという形で罪を全部ナチスに着せて終わった、ナチスは特別な時代であって、その後ドイツはまったく違う国として生まれ変わった、ということが言われるのですけれども、今現在の国立歴史博物館を見る限り、そうではありませんでした。

たとえば、各展示コーナーにはパネルがあって、そのパネルの中に先史時代から現代まで時代区分の示す目盛がついているのですが、その中でナチス時代も普通にひとつのパートとして扱われていたのです。つまり、ナチスを必ずしも特別な時代としては扱っていないのです。このことが印象的であり、また、おもしろかった点です。

かつ、ヒトラーももはやタブーではありませんでした。ヒトラーの演説を聞けるコーナーがあったり、ヒトラーのポスターが張ってあったりして、ヒトラーをタブー視していなかったのです。これは日本との大きな違いですけれども、軍事もタブーではないのです。もともと国立歴史博物館という場所は弾薬庫か何かの場所につくった博物館であり、極めて軍事的な場所なのです。そして、軍事はタブーではなく、かつ、館内の展示においても、ドイツ軍が使っていた兵器も置いたりしているのです。というわけで、日本と違って軍事もタブーではないということが非常に印象的でした。

## 戦争博物館のないイタリア

そして、アウシュヴィッツ、ベルリンに続いて敗戦国をめぐると思って、イタリアに回ったのです。イタリアにも当然戦争博物館があると思って、首都ローマに行ってきたのですが、実は戦争博物館というものがなかったのです。そもそもイタリアには国立歴史博物館自体もないらしいのです。何人かの専門家に聞いたのですけれど、

国立パスタ博物館はあるらしいのですが、イタリアには国立歴史博物館というものはないそうなのです。また、国立美術博物館は、中世で展示が終わっているのです。つまり、現代史を展示する国立博物館はないらしいのです。ちなみに、イタリア人が使っている歴史教科書を見せてもらったのですが、イタリアのことだけを描いているわけではなく、歴史教科書がそのまま世界史なのです。

イタリアという国は、そもそも「国家」というものを非常に描きにくい国らしいのです。特に南部と北部はまるで別々の国と言っているくらい違っています。先に工業地帯として発達していた北部、事実上その植民地だった南部という形で、北と南でまるで違う国であったという歴史が長くて、「イタリア」という国を統一的に描くことが非常に難しいらしいのです。

というわけで、そもそも国立歴史博物館もないのですから、国立戦争博物館もないわけです。そのかわり各地に「解放博物館」というものがたくさんあり、ローマでは2件ありました。これらは、いかに自分たちローマ市民がムッソリーニの圧政から自らを解放して新しい時代をつくったのか、ということを表示している博物館なのです。実はイタリアは、民衆が自国を解放していて、その後、枢軸国に宣戦布告をしているので、「敗戦国」とも言い切れないという事情もあります。

## 現場と齟齬のある中国

イタリア・ローマを回ってきたところで、中国の話をしたと思います。中国は、北京、長春、瀋陽、大連、上海に行ってきました。中国の特徴は先ほどもしゃべったように、「日本軍がこんなに悪いことをした。しかし、共産党は寛大な心があるから、今日は友好だ」ということを基本のフォーマットにしています。現地に行って感じたことは、少なくとも博物館を見る限りは、あんまりこの人たち本気で怒ってないんじゃないか、ということを感じたのです。

どういうことかといいますと、たとえば、国家博物館というものが北京にあります。たまたま僕が行ったと

きはルイ・ヴィトン展をやっている、ルイ・ヴィトンの方が戦争の歴史であるとか毛沢東よりも展示の扱いが多かったのです。こんなものなのかな、と印象的に感じました。

長春、昔の満州国・新京ですけれども、そこに立地している満州国の博物館も当然日本のことは糾弾していて、溥儀のことはぼろくそに言っているのですけれども、一方で博物館に併設されているレストランでは、「溥儀が愛した宮廷料理」というフェアをやっている、当時の食材を食べられるのです。この長春の博物館は、中国政府から観光地指定をされていて、実際たくさんの方がここに来てくるのです。ある意味で戦争時代を割り切ってしまう、それを観光資源にしようという思惑が非常に透けて見える場所でした。

大連と旅順に関しても同じようなことを思いました。ちなみに、僕が旅順に行った2011年は、ちょうど『坂の上の雲』が日本で放送されていた時期だったのです。旅順の博物館では、『坂の上の雲』関係の日本語のポスターがたくさん張ってあって、『坂の上の雲』にまつわるキーホルダーとかグッズがたくさん売られていました。203高地に登ってみると、そこには土産物屋さんがあって、日本語をしゃべれるおばさんが土産物を売っているのです。国家としては日本を糾弾するのだけれども、一方で、それを観光地にしようというしたたかさがあると言うか、徹底してなさというのを感じました。

徹底してなさと言えば、上海でそれをすごく感じる出来事がありました。上海には当然、戦争博物館というものがあ、その戦争博物館に僕が行ったときは、たまたま愛国教育の一環として地元の小学生が来ていたのです。そして、この博物館には映画館が併設されていて、本来は中国共産党を褒めたたえ、かつ日本のことをだめという戦争映画が流されているはずなのですけれども、実際その映画館で流れていたのはディズニー映画の『白雪姫』だったのです。つまり、子供たちが泣きわめいたり、はしゃいだりして抑えることができないから、結局ディズニー映画を見せたりしているわけです。そして、先生

たちもずっとスマートフォンをいじったりしているわけです。

どういうことかということ、国家としては上から押しつけて戦争博物館を各地につくっており、愛国教育も上からの押しつけでちゃんといこうとしているのですが、そこで何を教えるか、何をするかということは結局現場に任されているのです。このように、上海では国家と現場との齟齬みたいなものを感じました。

## エンタメ性のある韓国

中国と比べて韓国の戦争博物館は、より本気だなということを率直に思いました。たとえば、天安という場所にある「独立記念館」は、面積が400万平方メートル、ディズニーランド8個分が戦争博物館のためにつくられた場所で、たぶん世界最大の戦争博物館だと思います。この広大な博物館の敷地に入ると、まず815本の韓国の国旗が掲げられた場所で迎えられるのです。僕が訪問した時は、ちょうど竹島・独島問題が盛り上がっていた時なので、「独島は韓国のものである」という展示も同時にされていました。

この博物館は、非常にスタイリッシュで、おしゃれで、お金がかかった博物館なのです。7つの巨大な博物館があり、戦争映画を放送する4Dシアターという、3Dだけではなくて振動も感じられるようなシアター等、いろいろな施設が立ち並び、歴史教育の中心地になっています。この博物館は「独立記念館」とは言いますが、実際は1910年から1945年の間のことにほとんどの展示が費やされているのです。

そして、戦争というものをすごくおしゃれな形で、かつ、楽しませて伝えようという、エンタメ性が非常に感じられる場所だったのです。たとえば、「独立戦争体験コーナー」という一角があるのですが、そこでは射撃の体験ができたり、射撃で兵士を撃つようなゲームですとか、韓国の国旗をいかにきれいにはためかせられるかということを競うゲームがあるとか、なんとかしてお客さんを楽しませようというエンタメ性を考えていた場所でした。

そういう巨大な博物館がソウルにもあるのです。ソウルの戦争博物館では、竹島と記念撮影ができるフォトゾーンがありました。僕が行ったときは、事情が分からないヨーロッパ人が、そこで韓国の国旗を持って写真を撮ったりしていて、ある種プロパガンダではあるのですが、お客さんを楽しませようとする演出がたくさんある博物館でした。ちなみに、両方の博物館とも無料ということもあってお客さんは非常に多いのです。

特に日本と違うなと思ったのは、戦争博物館のすぐ目立つところに、「自由と平和は、ただではない」ということが書かれていたことです。つまり、「平和」のイメージがまるで日本と違うと思うのです。たとえば、戦争博物館内に「平和」の重要性を謳うイメージ映像を上映しているコーナーがあります。仮に日本で「平和」と言うと、鳥が青空を飛んでいるとか、草原であるとか、そういうことを思い浮かべる人が多いと思うのです。でも、ソウルの博物館で「平和」というイメージとして上映されていたのは、銃を持って国境を守る兵士の映像だったのです。「平和」という概念が、日韓両国ではこれだけ違うのだ、ということを感じました。

韓国という国はちょっと前までは非常に貧しい国でした。それが非常に豊かになってはきたけれども、まだ戦争は続けている状態にあるわけです。いまだ休戦状態であるということの凄さを感じた場所でした。

## 戦争の総括をしていない日本

その他としては、シンガポールであるとか、香港とかいろいろな国の戦争博物館に行ったのですが、いろいろな国を回ってきて、翻って日本のことを考えると、日本はすごく特種な場所だなと思ったのです。日本には国立の戦争博物館というものがありません。国立歴史博物館も1983年までなかったのです。しかもたいはどこの国でも、国立歴史博物館は首都であるとかアクセスがしやすい場所にあるのに、日本では千葉県佐倉にあるのです。佐倉の博物館は、東京駅から高速バスで行くか、もしくは最寄駅からバスか車で行くような非

常にアクセスが悪い場所にあります。しかもこの博物館は、現代史のコーナーが2010年までなかったのです。歴史博物館なのに明治ぐらいで歴史が終わっていたのですね。これは何でかという、やはり「戦争のことを描きたくなかったから」という理由だそうです。国立博物館が戦争のことを描いてしまうと、それはすなわち国家の意思となってしまう、だから国家として戦争を語りたくない、現代史コーナーを展示したくない、ということだったらしいのです。

とはいえ、ようやく2010年に現代史コーナーが開設されたのですが、それがすごく無味乾燥なのです。たとえば、「戦争」の体験談もなく、かつ何かを実感できるようなものもなく、ただ年表があったり、道具が置いてあるだけなのです。唯一、エンターテインメント性がありそうなものは、当時日本軍が使っていた銃が置いてあって、その重さを体験できるというコーナーがあることです。でも、これも一悶着があったらしくて、初めは銃を実際に構えるような高さまで持ち上げられるようにしようとしたらしいのですが、そうすると銃を撃つまねをする子供が出てきてしまう、ということで、それはやめた方がいいということで、20cmぐらいしか持ち上げられないような銃の展示になっていました。しかも、これを決めるプロセスで、館内ですごくもめたらしいのです。

また、沖縄戦に関しては資料がドカッと置いてあって、各自自由にお考えください、という形で、明言を避けているのです。自分の国のことを語りたくない、特に戦争について語りたくない、ということがありありと分かるような博物館でした。でもこれは、今の最新の博物館展示学から考えたら非常におかしい話なのです。

最近、博物館展示学という学問が盛り上がっているのです。今までの博物館は、物を収集してお客さんに見せればいいぐらいの形で、見せ方であるとか展示方法についてはあまり注目が集まらなかったのです。ところがここ数年、博物館をちゃんと見てもらうためには、来てもらった人に学んで楽しんで帰ってもらう必要があるということで、博物館をいかにおもしろくするか、いか





にエンタメ性を高めるかという意味も込めて、博物館展示学という学問が非常に流行っているのです。こうした状況にあるにもかかわらず、戦争博物館に関しては、それが例外であるようなのです。「戦争」という重いテーマを扱うので、その体験をさせることにどこか拒否反応がある、どこかに歯どめがかかっているということで、難しくなっているのだと思います。というわけで、この国立歴史民族博物館の現代史コーナーも、「戦争」に関しては努めて無味乾燥な場所にしているように思いました。

ただ、これは別にこの場所だけの問題ではなくて、日本という国の戦争の記憶の残し方と関係してくる話だと思うのです。そもそも日本は、「国家」としてあの大きな戦争をどう残すのか、大きな記憶というものを持っていない国です。これに対して、冒頭に紹介したアメリカ、中国、韓国は非常に分かりやすいわけです。アメリカは勝利の物語を描けばいいわけです。中国や韓国は、「日本にこんなことをされた。でも今は日中友好だよ、日韓友好だよ」という話を描けばいいのです。しかし、日本の場合は、「戦争」というものをどう描けばいいかということを経済学はまだ決め切れていないのですね。

これはよく言われる、日本は「戦争」を総括できていないという問題とも関係してくると思います。日本という国は、「戦争」をどう扱うかということについて、ずっとダブルスタンダードでやってきました。サンフランシスコ講和条約を結び、東京裁判を受け入れて、つまり日本は敗戦国として自分たちを認め、そこの中でアメリカの

手助けをかりて国際社会に復帰したわけです。一方で、日本国内では東京裁判に納得できない政治家がたくさんいたし、国民にもたくさんいたので、東京裁判に反するような言動も許されてきました。この点でドイツとは違うわけです。ドイツは戦争を美化するようなことを言うことは禁止で、つまり言論の自由を制限してまで、戦争の総括をしてきました。日本はそうはしてこなかったのです。「戦争」というものの総括をしないまま、今までやってきたわけです。そのことが象徴的にあらわれているのが戦争博物館という場所だと思います。

## 若者だけが戦争を知らないのか

こういう話になると、若者ほど戦争を知らないとか、上の世代の方が戦争を知っている、とかいう話になってしまうのですが、実際はそうではないのです。私の本でも図表で紹介していますが、NHKが2005年に行った世論調査からの抜粋です。「日本が一番長く戦った国を知っていますか」、「同盟関係にあった国はどこですか」、「真珠湾攻撃の日はいつですか」、「終戦を迎えた日はいつですか」、ということ各世代に聞いたアンケート調査なのです。結果を見てもらえば分かるように、確かに戦後派、特に若い世代は、真珠湾攻撃がいつかということあまり知らない結果となっています。真珠湾攻撃に関しての正答率は22%です。長く戦った国も31%しか正答していません。同盟関係にあった国も47%しか知らないのです。全問正解は10%しかありませんでした。

ただ、一方で戦争を経験したはずの戦中世代も、この4つの質問をしたときにちゃんと答えられているわけではないのです。長く戦った国が分からない人が半分以上いますし、同盟関係にあった国、真珠湾攻撃の日も半分以上しか知らないのです。だから戦争を経験した世代であっても、そのようなことを覚えているわけではないということです。

また、「広島原爆の日はいつですか」、「長崎の原爆の日はいつですか」と聞いてみたところ、若い世代を全国で見ると25%しか知らないけれども、実は70歳以上

の、これらの史実をリアルタイムで経験したはずの世代も同じぐらいの正答率しかないのです。かつ、広島に住んでいる人であっても、全員が全員この日を覚えているわけではないという結果となっています。これは、ある意味意外な結果だと思うのです。東京にいと、広島の人にはみな「原爆」ということを非常に重くとらえていて、「原爆の日」には毎年メモリアルの行事が開催されるということで、広島市民は全員、あの日のことを大事に思っているのだらうと思ってしまうのですけれども、実際に「原爆の日はいつですか」と聞くと、正答率がだいたい7割ぐらい、特に若い世代では5割ぐらいしか知らないという結果となっています。

長崎についても同じですね。長崎の原爆については、全国ではだいたい25%ぐらいしか知らないのですが、長崎市民であっても正答率は非常に低い結果となっています。だから、若い世代ほど戦争を知らないとか、長崎や広島の人には戦争のことをよく知っている、というふうに一言で言えますけれども、実際にはそうでもない、ということがあらわれてくる調査結果だと思います。

ところで、「終戦を迎えた日」という質問については、このNHKの調査では「8月15日」が正解となっていたのですけれども、この講義の課題図書として提示した『8月15日の神話』という本で書かれているように、そもそも終戦を迎えた日が8月15日ということも実は非常に怪しい話なのです。確かに8・15に玉音放送は流されました。そして現在では法律で8・15は「終戦の日」とちゃんと制定されていて、確かに8・15に戦争が終わったことになっています。けれども、国際法の視点から見たら、多くの国で対日VJデーは9月2日になっています。つまりミズーリ号上で休戦協定を結んだ日です。日本だけの視点で言えば、8月15日ではなくて、御前会議で戦争をやめるということが決まった日を「終戦の日」にしてもいいわけです。にもかかわらず、なぜか8月15日という日が「終戦の日」ということになっているのです。だから、本当は8月15日を「終戦の日」というふうに言う正当性がどうなのかは怪しいのです。

このように、戦争を知っている/知らないということについて、思ったほど上の世代が知っているわけでもないし、かつ、8月15日は「終戦の日」でしょうとなんとなくみんなが思っていることも、それをたどったら怪しかったりもする、ということが分かると思います。

## 戦争＝「あの戦争」なのか

きょうはいろいろな話をしてきたのですが、そろそろまとめに入りたいと思います。僕は、そもそも戦争について僕たちはどれだけ知っているのだろうか、ということについて考えているわけです。たとえば日本では、戦争について学校の教科書で習う、であるとか、『火垂るの墓』や『はだしのゲン』等の作品を通じて戦争のことを思い出すとか、そういうかたちで戦争のことを知る人が多いと思うのです。

たとえば現在、集団的自衛権の問題が盛り上がっています。この集団的自衛権に関して反対派は、徴兵制が復活するとか、日本が空襲で攻められる国になってしまう、ということを行っています。けれども、それは戦争というもののイメージが、あまりにも第二次世界大戦に縛られているからなのではないのか、と僕は思うのです。

世界の歴史を見てみると、国と国が総力を結して戦争というものは、「あの戦争」以降ほとんど起こっていません。そういう国と国が戦争総力戦というものはどんどん減ってきていて、逆に終わりが無い紛争であるとか、国境付近での小競り合いというものが増えてきているのです。ですので、今現在において「戦争」と言ったときには、必ずしも「あの戦争」、すなわち太平洋戦争ではあり得ないはずなのです。にもかかわらず、戦争に関する話題が出るたびに、なぜか「あの戦争」に関する話題やイメージばかりが想起されるのです。

このこと自体は、確かに戦争に関する抑止力にはなっていないと思うのです。しかし、それが果たしてどれだけ意味があることなのか、ということも同時に思うのです。逆に、戦争イコール「あの戦争」というふうに思っていると、現在世界のさまざまなところで起こっている戦争、

もしかしたらこの国が巻き込まれるかもしれない戦争というものに対する想像力を奪ってしまうことになるのではないかと、ということも同時に思うのです。

今現在、現実的に日本で戦争が起こるとしたら、尖閣諸島が攻撃されるとか、国境付近で戦闘機同士が交戦するという形ではあり得ると思います。そして、そういうことが起こっても、日本で徴兵制は始まらないだろうし、総力戦にもたぶんならないだろうと思います。にもかかわらず、戦争という話題が出るたびに、賛成派も肯定派もなぜか「あの戦争」ばかりを想起してしまうのです。だから、戦争イコール「あの戦争」としてしまうことの弊害というものは非常に大きいと思うのです。

しかも、紛争の時代という話を先ほどしましたけれども、戦争の在り方も変わっています。たとえば、イラク戦争のときによく言われたように、世界的には民間軍事会社や傭兵が活躍する時代になってきています。かつては、国民軍対国民軍の戦争が中心でしたけれども、今はそうではなくて傭兵であるとか、自国の国民ではない人が命を落としたりしているのです。だから、確かに一般の日本人は戦後に戦争に巻き込まれてこなかったと言えるのですけれども、一方で民間軍事会社に入って、そこで命を落としている日本人はいたりするのです。

また、各国がロボット兵の開発を進めていますし、無人機の問題もあります。こうした無人機やロボットがどんどん戦場に入り込んでいるのです。というわけで、人と人が、歩兵対歩兵が銃を持って戦う戦争というものは、どんどん過去のものになりつつあるのですね。こうした中で、「あの戦争」を基準にして「もう戦争を起こしません」と言ったとしても、どうしても空疎になってしまうと思うのです。

一方で、そもそも「あの戦争」自体を僕たちは知っているのかという問題もあると思います。先ほどお話しした「長崎原爆の日」をみんなが知らないということがその象徴です。また、「終戦の8月15日の青空」ということもよく言われます。「8月15日の青空」の話は多くの人がするのですけれども、実際に気象図を見てみると、8月15

日は確かに東京の一部では晴れていたのですけれども、曇りがちの晴れだったみたいです。しかも東京ではなくて違う地方を見てみると、曇りとかひょう雹とかの場所も多いのです。当時の日本領土を考えると、韓国とか中国に関しては、必ずしも青天なわけではないのです。にもかかわらず、なぜか「8月15日は青空」というふうに想起されてしまうわけです。

だから、どんな記憶もある種のフィクションの上に成立している、と僕は思うのです。日本はその意味では、「8月15日の青空」であるとか、そういう部分部分におけるフィクションというか、共同のイメージについては、つくってこれただけけれども、国際的に通用するような大きな記憶というものは、たぶんつくれてこなかったのだと思います。先ほどダブルスタンダードという話をしましたけれども、国家としての戦争の記憶というものを、結局つくれてこなかったのですね。それがゆえに今のさまざまな混乱があると思うのです。

たとえば、靖国神社へ行く、行かないにしても、本当は国立の追悼所を別につくれば済む話なのですからけれども、歴史的経緯を考えるとなかなかできなかつたり、それに反対する政治家がたくさんいたりして、どうしてもダブルスタンダードというものがずっと続いているわけです。そういうこともある以上、なかなか戦争の総括は難しいのではないかと思います。

## 日本のアキレス腱としての「戦争」

翻って、きょうの話をまとめたいのですけれども、戦争博物館については2011年から始めて、3年ぐらいいの間、旅行のたびに回っていたこととなります。各国に行くたびに、国ごとの違いというものを意識させられました。ただ、どこの国も都合の悪いことはごまかしたがるのです。たとえば中国に関して言えば、歴史博物館に行っても文革時代のことは大して描かれていませんでした。韓国では軍事政権下のことはさらっと流されています。つまり国家の正当性にかかわることは、どこの国も隠しておきたいし、あまり触れたくはないのです。

日本の場合、それが「戦争」なのだと思います。日本という国はいつできて、どんな正当性のもとに成り立っているのか、という日本のアキレス腱みたいな正当性の問題が戦争にかかわっている以上、日本としてはなかなかそれを提示しにくいのです。文革とか軍事政権という問題はある意味で国内の問題ですけれども、日本が不幸なのは、「戦争」というものは相手がいる問題であるということです。だから日本国内で勝手に記憶をつくりかえることができないのです。勝手に記憶をつくりかえようとすると、そもそも東京裁判はどうするのだ、とか、サンフランシスコ講和条約はどうするのだ、という形で、海外も巻き込んだ話になってきてしまうのです。だから、日本の国家としての正当性におけるアキレス腱が「戦争」であることの不幸を、日本のあいまいな戦争博物館は教えてくれるのだと思うんです。

難しいのは、これからの話です。今までの日本は、ずっとこうやって曖昧にやってきました。でも、曖昧にしたいくないという一派も出てきています。そこで総括ができるのかということですね。

終戦から今年で69年目、来年で70年目になり、ほとんど生存者がいなくなってきました。戦後すぐだったらみんなが戦争の経験者ですから、こうしましょうとか、こういう方向で行きましょうという合意も得られやすかったと思うのです。ただ、もはや戦争の実体験がない中で、戦後の記憶しかない中で、いかに戦争というものを総括できるのかということ、非常に難しいと思うのです。よくも悪くも、結局ダブルスタンダードはこれからも続いていくでしょう。そして、戦争に関して海外から何か言われたりとか、それに対して日本が言い返したりという、戦争にまつわるぐだぐだした事態は、8月が来るたび、もしかしたら8月ではなくても、これからもずっと続いていくのではないかと考えています。

戦争博物館についての本を出した後、どういう博物館をつくれればいいのか、とよく尋ねられたりしました。しかし、それはすごく難しい問題です。博物館は箱モノでもあるし、日本という国がどんな歴史を描くかというこ



とを選べない以上、博物館もどうしても曖昧になってしまうのだと思います。かつ、1個の歴史だけを選ぶことはできないとなると、博物館というものをつくる意味自体もないのではないか、とも思うのです。

しかし、別に「あの戦争」のことを大して知らない人であっても、世界平和を願うことはできるのです。逆に「あの戦争」を知っているがゆえに、今起こっているようなさまざまな小さな戦争、紛争の危険性を見逃すことがあるのだとしたら、むしろ戦争博物館というものはなくてもいいし、戦争の総括ももしかしたらなくてもいいかもしれないし、そもそも戦争というものをちゃんと教える必要があるのかどうかも分からない、ということになりました。

その辺の話は後半のディスカッションの中でしていけたらいいなと思っています。一方的に話すのはこれぐらいで終わりにしたいと思います。どうもありがとうございました。(拍手)



## Part2 : 質疑応答

【太下】 古市さん、ありがとうございました。

それではディスカッションに入りたいと思います。事前に準備してきているメンバーがいると思いますのでよろしくをお願いします。

【西田】 大阪の研究開発第2部の西田と申します。ふだんは環境問題とか自然保護分野の調査を担当しています。今回は戦争の話ということで、まったく知らない世代ですが、今回いろいろな本を読ませていただいて、改めて勉強させてもらったところです。

早速、質問なのですが、過去の戦争、特に太平洋戦争を将来にどういうふうに生かすのかというところを伺いたいと思っています。おっしゃる通り、太平洋戦争がどうであったかとか、誰が原因であったかとか、そういった知識だけでは、今後起こり得る将来の戦争、これから考えられるような戦争に対してはあまり生かせないのではないかという点については私も同感です。

ただ、日本人の心の中に、戦争は知識としてはなくても、何となく怖いものというか、怖ろしいものという恐怖感だけは伝わっているように思っています。戦争にかかわっていかないという路線を日本が仮に目指すのであれば、この恐怖感というものを伝えていくことは意味があることなのではないか、と思います。そ



西田氏

ういったとらえ方で私は聞いていたのですが、これから戦争について何を伝えていくのかという点について、もう少しお話を伺えればと思います。

【古市講師】 ありがとうございます。恐怖感に関して言えば、ジブリの『火垂るの墓』を毎年放映していればいいのではないかと思うのです。ただし、『火垂るの墓』は、だいたい2年置きぐらいに放送されていたのですが、視聴率がどんどん落ちてきているらしいのです。去年は戦争ものの作品が、『風立ちぬ』をはじめいくつか公開されましたけれども、昔ほどは興行成績が振るわなくなってきているようです。でも、『永遠の0』はすごく流行ったのですよね。ただし、『永遠の0』のように、特攻隊を賛美とまではいかないけれども、肯定的に描くような映画がヒットしたということは、戦争の悲惨さを伝えたいと思っている立場の人から見て、果たしていいことなのか、悪いことなのかという問題があると思うのです。

戦争は確かになんらかの形で伝わってきています。でも、戦争のことを残したい派閥は大きく2つに分けられていて、あの戦争は正しかったと思いたい派と、あの戦争は二度と繰り返したくない派の2つがあることが難しい点ですね。よく年配の方が若者に「戦争を知ってほしい」と言うのですが、そういうときに暗黙のうちに、自分と同じ考えの人が増えると思込んでいるようなのです。でも実際は違って、戦争に関する知識が増えても、自分と同じ考えの人が増えるわけではないのです。

難しい点は、戦争というものはどうしてもイデオロギーと絡まってしまうので、結局のところ派閥に分かれてしまうと思うのです。こうした中で、ただ伝える、ということが非常に難しいことだと思うのです。こうしたことから、たとえば教育に対して過剰な期待が両派閥から起こっていると思うのです。戦争のことや歴史のことをちゃんと子供たちに伝えなければいけないということについては、いろいろな人が言います。でも、結局学校で何を教えるのかということについては、



古市講師

みんな大して議論していないわけです。たとえば、日教組の教育によって日本はすごく自虐史観が生まれた、ということをする人がいますけれども、実際その人たちも日教組の教員に教育を受けてきたわけです。自分たち自身がその反証になっているように、日教組の教育は実は影響がなかったりするわけです。そもそも子供たちに戦争や平和ということをいかに伝えていくかということに関して、学校教育に頼り過ぎているのではないかと僕は思ってしまうのです。

一方で、当然に恐怖感というものは、戦争が起こることに対するなんらかの歯どめにはなっていると思うのです。たとえば、日米両国で行った調査結果を見ると、日本人のだいたい75%は、たとえ理由があっても戦争を起してはいけないと答えています。一方で、アメリカだと同じ75%は、理由があつたら戦争はやむを得ないと答えています。こうしたことから、日本人の非軍事に対する欲望みたいなものは、教育とかどうこうではなくて、ある種全体的に共有されていると思うのです。

こうした感情はすぐには変わらないですし、すぐに変わらない以上、それを無理に教育で恐怖感をあおって伝えていくよりは、今現実に75%の人が「戦争は絶対だめ」と思っているということだけで僕はいいのではないかと思っているのです。だから、恐怖感のような感情をどう生かすのか、ということは難しいと思いますし、それはたぶん国単位でできることはあまりな

いと思うのです。

先ほど千葉の佐倉にある歴史博物館はあいまいだという話をしましたけれども、一方で、日本には全国各地に平和博物館というものがあるわけなんです。こうした小さなレベルで戦争を伝えることぐらいしか、今できることはないのではないかという気がします。

**【西田】** ありがとうございます。もうひとつ追加で伺いたいことがあります。

おそらく恐怖感というものが戦争の抑止に一定の程度効いてきたと思うのですが、こうした過去の戦争に対する恐怖感みたいなものが、経済の仕組みであるとか日本人の考え方に影響を与えたのかということについて、戦争社会学の中では考えられているのでしょうか。たとえば、日本人は世界の他の国の人々と比べて争いを好まないという傾向があるとして、それは戦争に対する恐怖感のようなものから影響が来ているのかどうかという分析が戦争社会学の分野でなされているのかどうか、教えていただければと思います。

**【古市講師】** 戦争の一般国民に対する影響はもちろんあると思うのですが、実は戦後のほとんどの思想は、戦争体験から生まれているのです。たとえば、丸山眞男もそうですし、江藤淳でもいいですし、大江健三郎でもいいのですが、戦後の名立たる言論人、文化人、小説家というものは、「あの戦争」の強烈な体験から思想を紡ぎ出している人が多い。戦後思想というものは、そもそも敗戦の記憶から始まっているのです。その意味において戦争が与えた影響は当然大きいものがあると思います。

一方で、日本という国家は、非軍事という憲法を掲げており、国民はそのことを何度も教えられてきましたし、実際に大規模な戦争を起していないのですから、当然人々の意識にも影響は与えていると思います。ただ、それは単純に平和を願う心かという話ではないと僕は思っています。そして、それは「一国で閉じこもり過ぎではないか」という批判にずっとさらされてきた

ことにもつながっているわけです。

このことは戦争だけに限る話ではないと思うのです。日本は人口が1億3,000万人もいる国であって、内需だけでやってこれた国であったがゆえに、そもそも外向きに視点を向けにくかったという状況があると思うのです。そういうこともあって戦後、海外での戦争に参加しようということについては、決断してこなかったわけです。そして、いろいろな社会的要因が重なって、国内だけでガラパゴス的になってしまうという現象が起こっていると思うのです。もちろん、戦争の影響はあったと思うのですが、世代がこれだけ変わってしまうと、今の社会において戦争の影響がどれだけ残っているかということはなんとも言いにくいと思います。

ただし、日本のように軍事というものが当たり前ではない国と、ヨーロッパのように軍隊が当たり前にある国では、軍事とか戦争に対する距離の取り方は当然違うと思います。日本では徴兵制もないですし、自衛隊についてもある時期まではネガティブなイメージを持たれていました。そして、軍隊がないということと、「何が起ころうと戦争を起してはいけない」と答える人が75%いるということはたぶん関係していると思います。一方で、ヨーロッパは戦後すぐにほとんどの国が徴兵制度を導入しました。ドイツもずっと徴兵制度をしていました。ヨーロッパの各国で徴兵制度がなくなるのは1990年代から2000年代頃なのです。ドイツは2010年、スウェーデンも2010年ぐらいまで徴兵制がありました。

**【西田】** 分かりました。ありがとうございました。

**【谷口】** 大阪で経営コンサルティングをやっております谷口と申します。今日は素晴らしいお話、ありがとうございました。

先生の著書で、『誰も戦争を教えてくれなかった』を拝読していたのですが、各国の歴史博物館での戦争の扱いや認識にかなり違いがあるということを書かれていたかと思います。この中で読んでいて感じたのです



谷口氏

が、たとえば「正しい歴史認識」ということが各国政府の首脳なりマスコミで語られる場合があるわけですが、果たしてそういったことが実際に可能なかどうか。あるいは「正しい歴史認識」というものを共有しないから、問題が起きているということがよく語られているのですが、逆に「正しい歴史認識」という言葉を出すほど戦争が近づいているような気がしてしまっていて、その点についてお考えをお聞かせいただけないでしょうか。

**【古市講師】** このことについては、アメリカと日本の例を考えるのが非常に分かりやすいと思うのです。ちょうど去年、僕はネバタ州ラスベガスの核実験博物館という場所に行ってきましたのです。ネバダ州は今でこそカジノの街となっていますけれども、ある時期までは核実験の街でした。そして、ずっと核実験が行われていたのですが、ネバタ州では「キノコ雲」というものがポジティブなイメージとして想起されるらしいのです。ということかということ、今では核実験は全部、地下で実施しますから、キノコ雲は上がらないのです。一方で、キノコ雲が上がっていたのは1960年代初頭までですが、これはちょうどアメリカの黄金時代と重なるのです。つまり、経済が成長していて、国がどんどん豊かになっている、そういうアメリカの古きよき時代の象徴というものが、ネバタ州ではこのキノコ雲らしいのです。ですから、ネバタ州の博物館では、キノコ雲は非常にいいものとしてとらえられています。長崎、広



島に落とした原爆についても、当然悪いことではなくて、あの原爆を落としたがゆえに戦争が終わった、という形でポジティブに評価されています。

同じキノコ雲、同じ原爆であっても、日本とアメリカでまったくイメージが違うのです。すなわち歴史観が違うわけです。一方で、これだけ歴史観が違うにもかかわらず、日本とアメリカは友好国であり、同盟国であり得るわけです。ですから、歴史観が別に一致しないとしても、国と国は仲よくなれると思うのです。

翻って考えてみると、歴史観を一致させようという努力自体については別に否定しませんけれども、歴史観を一致させること自体がそもそも難しいですし、そんなことをする必要もないのではないかと思います。歴史観というのは、ひとつの国の中でも違ってくるわけです。「あの戦争」に関して、司令側にいた人、死んだ兵士、生き残った兵士、遺族等、立場によってまるで歴史観は違うわけですから、それを一致させようという努力自体がむなしではないか、という気がします。

**【谷口】** ありがとうございます。

もうひとつよろしいでしょうか。本日は映画『火垂るの墓』の話が出てきましたが、いろいろな戦争映画を観るときに、日本とアメリカではだいぶ違うなと思っています。特に日本の場合はアニメがかなり盛んだと思いますが、日本のアニメの場合は、主人公はいや応なしに戦争に巻き込まれて、結果的にロボットを操縦して戦うことが多いと思います。戦争は駄目だという認識に立ちながら、結果的に戦ってしまっているようなストーリーが頻繁に描かれているような気がしていますが、このあたりは社会学的に説明できる背景はあるのでしょうか。

**【古市講師】** わけの分からない戦争にいきなり巻き込まれた主人公というジャンルは、『エヴァンゲリオン』を初めとして多数ありますよね。今公開されている、邦題が『オール・ユー・ニード・イズ・キル』という日本のライトノベルをもとにしたハリウッド映画があるん



ですけれども、あれも本当にわけも分からない戦争に巻き込まれて、わけも分からないまま戦うという形です。最近の日本の戦争映画に関して言うと、そういう動機も描かれず、別にどこの国とも知れないような戦争みたいなものを描くという作品が多くなっているということがよく言われます。お答えになっているかどうか分からないですけど。

**【谷口】** ありがとうございます。

**【秋元】** きょうは貴重なお話、ありがとうございました。東京本社でエネルギー関連のコンサルティングを専門にやっております秋元と申します。

お伺いしたいことはメディア関係の話になります。先生のご著書の『だから日本はズレている』を拝見させていただきましてけれども、こちらでは、「正しさではなくもっともらしさが勝つ」とか、「真実はいつも一つなんて嘘」というフレーズが出ています。きょうのお話を聞いていても、たとえば戦争博物館で伝えられている記録等について、当時戦争が起こったところにはひとつの事実であったものが、誰がどう伝えるかによって意味がいろいろに変わっていく、ということがあったかと思います。要は情報を伝える媒体がどういふふうにならざるを得ないかというところがポイントになると思っています。

こうした中で、今後この第二次世界大戦を伝えていくうえで、新聞とかウェブでもいいのですけれども、メディアの役割はどのようなものがあるとお考えでしょうか。また、メディアが戦争について伝えていくこと





秋元氏

が本当にできるのかどうか、その点についてお伺いできればと思います。

**【古市講師】** メディアのうち、どうしても上から目線で物事を伝えるマスメディアに関しては限界があると思います。8月15日が近づくたびに、各メディアが戦争体験の検証ということを言うわけですが、結局それがどれだけ伝わっているかどうかは怪しいということを示すのが、先ほどの戦争に関する正答率の低さだと思うのです。終戦記念日がいつなのかも分からない、真珠湾の日がいつなのかも分からないのです。メディアの側では勝手に伝えた気持ちになっていたのだけれども、実際それが戦争の知識として定着しているわけではないのです。

そもそも、メディアにできることは限られていると思うのです。これは別に戦争に限らずあらゆることに言えると思います。メディアであるとか、教育であるとか、ある人が大多数に向けて発するメッセージは、そこまであまり影響を持たないと思うのです。それは非常に効率的だし、効率的だからこそ、みんながその威力を求めて右往左往するわけですが、実際はその効果は非常に限定的だと思うのです。

もちろん、メディアが戦争をあおった面も当然あると思います。しかし別にメディアだけがあおっても、戦争が始まるわけではないですよ。たとえば、ナチス・ドイツのヒトラーの宣伝術が人々を先導したということがよく言われますが、それこそ『八月十五日の神

話』を書かれた佐藤卓己さんに言わせると、ナチスはそんな大したことはなかったらしいのです。ナチスが作った映像におけるヒトラーの演説を僕たちは見ているから、あの演説はすごいと思うけれども、でも実際に生で見た人の感想を聞いてみると、別にあれは画期的でも何でもなかった、普通に使い古された手法をただなぞただでであったということが言われていたりします。だから、メディアで人々を先導するということは、言われるほど実はできないのではないかと考えています。

あと真実はいつもひとつかどうかという話に関して言うと、ついこの前に東京都議会の「やじ問題」がありましたけれども、あれはマスコミのカメラも入っている、ボイスレコーダーもたくさん回っている、人々もたくさんいるにもかかわらず、やじが誰かということさえも特定できなかったわけですね。ひとは名乗り出ましたけれども、あとはうやむやになったことがあります。あの事件は、これだけテクノロジーが発達した時代でも、歴史的事実というものをひとつに同定させることが非常に難しいという事例だと思うのです。ある事実をメディアがどう伝えるかという問題はあり得ますが、たとえどう伝えようと、そんなに歴史に影響は与えないし、与えられる影響は、人々がメディアに関して思っているイメージよりも小さいのではないかと考えています。

**【吉田】** 今日はどうもありがとうございます。東京のコンサルティング事業本部で、組織と人事に関する分野を専門とするコンサルティングをしております吉田と申します。よろしくお願いいたします。

古市先生の本のタイトル『誰も戦争を教えてくれなかった』ということからいいますと、私は今ご質問させていただいた者よりは年代が上でございまして、先生が本の中で書いている表現方法をお借りすれば「吉田(+14)」という立場です。私自身はもちろん戦後生まれですから、戦争は個人的には経験していませんが、父親が当時満州にいまして、関東軍の一部隊にお

りました。衛生兵でしたから戦場に行って人を殺したりはしていないのですが、一応父親から戦争の話は聞いております。衛生兵関係をやっていたものですから、たまたま現地で伝染病にかかってしまって、体を壊して日本に戻ってきた。もう今では死語になっていますが、いわゆる「傷痍軍人」という立場で戦後を生きなければならなくなったんですね。

個人的に戦争がいいか悪いかというのは、実際自分も経験していないし、よく分からないところもありますが、ただ戦争というものが、人ひとりの人生をふいにするという事は、戦争体験者を身近に見て、これは自分の父親でしたから非常に痛切に感じている。だから戦争すべきか、すべきでないかであれば、やはりしてはいけないものかなという思いは抱いております。

ただ、いろいろな本を読ませていただいて、先生のお話も伺ったりすると、その戦争体験というのは基本的にはその人の体験であって、置かれた立場や状況によって解釈の仕方が違うんですね。私はたまたま戦争を体験した父親からいろいろ聞かされたことを、あの戦争のリアルかなと思って、それで子供のころはそんな理解をしていたつもりでいました。

今の点でよく分からなくなってくるのは、ああいう戦争から離れて70年近くたつと、本当に戦争というのがどういうものか、われわれは身近に感じる事ができなくなっている。たとえばこの間の6月29日ですか、集団的自衛権に反発して、新宿で焼身自殺未遂を起した人間がいました。あのときに宮尾節子という詩人の詩がツイッターで流れて、一時期話題になりました。この詩については、皆さんお分かりにならない方もいるかもしれませんが、114文字と短い詩なので一通り朗読しますと、

明日戦争がはじまる

まいにち



吉田氏

満員電車に乗って  
人を人とも  
思わなくなった

インターネットの  
掲示板のカキコミで  
心を心とも  
思わなくなった

虐待死や  
自殺のひんぱつに  
命を命と  
思わなくなった

じゅんび  
は  
ばっちりだ

戦争を戦争と  
思わなくなるために  
いよいよ  
明日戦争がはじまる

こういう詩なんです。

われわれは映像を通じて暑い国の戦争のシーンを見たり、焼身自殺未遂をした人の映像もツイッターで見

れたりする中で、正直、間接的にそういうものが体験できるものですから、感心を示さなくなってしまう、本当の戦争というものに対しても何かこう無感動で見えるといいますが、非常に第三者的立場で見えるような状況にあるのかなと思います。

そうなってくると本当に戦争のリアルを、これから先歴史の事実として伝えていくことができるのだろうか。あるいはそういうズレは本当にあるのだろうか。そんな素朴な疑問ですが、最近の事件も踏まえて感じるところがありまして、今回は「戦争」がテーマでしたから、そういう観点で古市先生にお聞きしたいと思ひまして質問させていただきます。

**【古市講師】** 分かりました。ありがとうございます。

戦争が遠いものであるということは、今も昔もある種同じかなと思うのです。湾岸戦争の時には、画面の向こうで起こる戦争は、すごく遠いものであるように感じられました。「それは起こっていない」という評論家もいました。けれども、実は「あの戦争」のときも同じだったのではないかなと思うのです。たとえば、第二次世界大戦中でも空襲がなかった地域は別に戦争の被害をそんなに受けていませんから、そうした地域の人からしたら、たぶんあの戦争は非常に遠いものであったと思うのです。実際に、戦争中の映像で、ある村のおばあさんが、「今、日本はどこで戦争しているんだ」というふうに聞いてくるシーンが残っているのですが、そもそも日本がどこで戦争しているかということさえも知らない人が当時いたのです。だから、戦争から遠いということは、実は時代には関係なく、戦争の同時代であっても起こり得ることだと思ひます。

当事者性ということについて言えば、戦後の日本では確かに武力を使う戦争こそは起こっていません。けれども、自殺者は年間3万人弱いたりとか、いろいろな事件や事故は日々起こっているわけです。確かに戦死者はいないのですが、でも自殺者が3万人弱もいるという事実をどう考えるべきなのでしょう。果たし

てそうした死者の存在と戦争というものをそこまで区別して考えることができるのかといったら、違うのではないかなという気もするのです。この話は先ほど紹介していただいたツイッターの詩の件とも関係してくると思うのです。

戦争中は人を殺すことや殺されることがたぶん当たり前になっていたのだと思います。だから、戦争というものは人々にとって、どんどん慣れたものになっていったのでしょ。でも、同じことが今の自殺の問題にも言えると思うのです。自殺で年間3万人弱が死んでいるのです。交通事故のだいたい2倍、3倍の人が死んでいるわけです。そして、そうした状況がずっと続いているので、みんな当たり前のようにやり過ぎていて、特に問題とは思っていないわけです。でも実際に考えてみると、3万人弱というのは結構大きな数なわけです。そういう形で人々がなれていくということを見ると、「戦争」と「自殺」というものは実はそんなに違うものではないし、分けて考える必要はないのではないかなと思ひたりします。

一方で、「あの戦争」のことを伝えられるかどうかは、本でも書きましたけれども、すごく難しいと思ひます。それこそ韓国みたいに最新テクノロジーを使って、戦争の記憶を残すような博物館をつくったり、もしくは戦争のことをちゃんと理解できるようリアル没入型のシミュレーションゲームをつくったり、できることはたくさんある気はするのです。しかし、それは結局ある一視点における戦争にしか過ぎないわけです。そういうふうになら何かをこうしようという形で伝えるだけでは、本当に戦争のことを知ったことにはならないのです。

これに対して、各個人がたまたま戦争の記憶に出会うことは日々起こり得ると思ひます。東京でも戦跡は、分かりやすくはないけれども残っていたりします。今の若い世代であっても、祖父母、もしくはひいおじいちゃん、ひいおばあちゃんの代までさかのぼれば戦争経験者はいたりします。そうやって細々と戦争が伝

わっていくぐらいしかたぶん可能性はないと思います。逆に言えば、戦争に対する知ったかぶりみたいなことの方が、よりこれから警戒すべきことだと思うのです。ほとんどの人がもはや経験者ではないにもかかわらず、自分の方が戦争を知っているとかいう態度ですね。たとえば、日本人はお花畑であるとか、さも自分を上位に置いて誰かを批判するみたいな人が最近ふえている気がします。そういうことの方が、より警戒すべきことではないかと思うのです。

たとえば、日本には軍隊は要らないと言う人に対して、「お花畑」的な平和主義といった批判がされますが、そういう人はどこの国にもいるわけで、今現在軍隊がある国であっても、軍縮や軍隊をなくそうと思っている人はいたりするのです。むしろ、戦争について変な知ったかぶりみたいなことをやめる方が、戦争を知らしめようという上から目線の態度よりも大事なのではないかと思います。

**【吉田】** ありがとうございます。

**【大澤】** 会員向けの情報発信をしているコンテンツ編集室の大澤と申します。本日はどうもありがとうございます。

余談から入りますが、私はご著書に出てきた「あゆみさん」と同じく、もともと韓国とか韓流に全然興味なかったんですけど、Bigbangを聴いてからK-POPにハマった人間でして。同じくご著書で取り上げられているスーパージュニアについても、メンバーのイェソンが兵役に就いた、まさにその直後のコンサートに行っています。そういった経緯もあって、最近、韓国や中国の動きに興味を持つようになっていて、今日の話も非常に興味深く伺っておりました。

今月、中国の習近平主席が韓国に行って——今ちょうどドイツに行っていますけれども——韓国では「反日共闘」について、ソウル大学等で講演しています。先ほど、先生は「どの国も都合の悪いことは隠す」とおっしゃっていましたがけれども、この反日共闘という部分について、中国は朝鮮戦争において北朝鮮側に付いて



大澤氏

参戦したことや、300万人といわれる市民が犠牲になったことには言及しておらず、認識は第二次世界大戦で完全に止まってしまっています。

佐藤卓己さんのご著書に書かれていた「つくられる記憶」という観点では、もう戦後70年近くも経ってしまい、その度合いがより強くなっていく中で、特に中国と韓国は国家主導で歴史の再構築が行われているのではないかと。そういった国の「つくられた記憶」、しかも第二次世界大戦にこだわって日本が批判を受け続けている状況において、わが国としてはどのように対応していくべきでしょうか。特に、国際社会に向けた発信にあたり、私自身は、少なくとも今のように靖国参拝をしつつも平和主義を訴えていくのはうまいやり方ではないと思っているんですけれども、先生のご意見を伺いたいと思います。

**【古市講師】** おっしゃっていただいたように歴史とはそもそも都合よくつくれるものなのです。「反日共闘」のように、国家が自分に都合のいい歴史だけを選び取って、歴史をつくろうとしているということはどこの国でも起こっていますし、まさに日本でもそういうことをしたい政治家がたくさんいるわけです。ただし、東京裁判やサンフランシスコ講和条約という事実の上に今の日本という国がある以上、それを覆すことはできないのです。そのジレンマに今の自民党の改憲派も苦しんでいると思うのです。本当に国際世論を気にするのだったら、靖国神社というあいまいな場所には行か



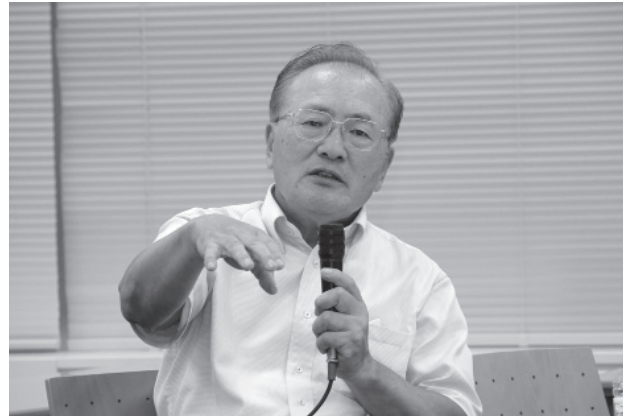
ないで、国立追悼墓地をつくり、しかるべき日に国家の要人たちがそこに行けばいいと思うのです。しかし、そういう案がありながらもなかなかできていないのですね。

一方で、実際問題として日本が国際的なインパクトを高めようと思った場合、分かりやすい目標を立てるとしたら、国連安保理の常任理事国になることだと思うのです。一時期日本もそういうことを言ったりしていました。ただし、安保理に入るにあたって、あの戦争の責任を全部認めなければ中国は納得しないわけです。ということを見ると、靖国には行かずに、ちゃんとした場所をつくった方がいいと僕は個人的には思います。ただ、それが日本遺族会の問題であるとか、当面は難しいのだろうなということも同時に思っています。どうしても論理では割り切れない情緒みたいところで、靖国に行く人々がいるわけです。それが外交上、得策かは分かりませんが、しばらくはこういう状態が続くのではないかと思います。

**【大澤】** ありがとうございます。

**【中谷理事長】** 古市さん、どうもありがとうございます。日本という国にとって重要な問題を提起していただいたと思います。とても難しい問題ですよ。本当にどうしたらいいか分からない。戦争博物館という切り口から各国の比較をしたときに、基本的に日本以外のどの国もやっていることが国威発揚なのです。自分の国こそ正しいのだ、ということの世界に知らしめる、その記憶、記録として博物館のようなものをつくって、そこを訪れた人が、ああこの国のやっていることは正しいのだ、と実感するわけです。

中国、韓国は日本をスケープゴートにして、それを世界に見せるということをやっているわけです。この厳流塾でも、西洋の国はアメリカのみならず、また、戦争博物館だけでなく一般に博物館というものは、西洋の世界支配の構造を定着させるためにあるのだ、という趣旨で書かれた松宮秀治さんの『ミュージアムの思想』という本を読みました。松宮さんの本にも書いて



中谷理事長

ありましたけれども、博物館は西洋の近代社会の構造を定着させるひとつの役割を果たしているわけです。広い意味では、それぞれ西洋全体をくくるといえるのか、それぞれの国単位で言うのかは別として、正当性の主張なのです。

ところが日本は国論が完全に分裂していて、戦争の総括もできないし、だから国威発揚をしようと思っても、普通日本以外の国のすべてがやっているこの「国威発揚」という基本コンセプトを、この博物館という構想の中に組み込むことができない。ですから、博物館どうするのと言われてもどうしようもない、というすごく特異な状況に置かれているわけです。

古市さんが言われたことは、僕が聞き間違いでなければ、もう博物館は要らないんじゃないのか、あるいは無理して総括することもできないし、そんなことを議論してもしょうがないからやめた方がいいんじゃないのか、ということだったと思います。でも日本人は、どんなことがあっても戦争はすべきではないという人が75%いる。だからそのところをよりどころにして、そこから日本という国のあり方を考え直していったらいいのではないかと。そういうご意見だと考えていいですか。

**【古市講師】** はい。

**【中谷理事長】** 僕もそれしかないだろうなと正直いって思います。けれども、これを万全のものにする方法はあるのかどうかということが僕の疑問です。というの

は、人間というものは、あるいはそれぞれの主権国家というものは、何とかして自分の身を守らなければいけないという本能があるわけです。人間個人個人にも、自分の個体維持という本能があると同じように。だから何も紛争が起こっていないときには、憲法9条は絶対守るべきだ、日本は世界にないような絶対平和を目指す国になるんだ、と言うわけです。これすばらしいですよ。これで世界の人たちに、日本はどうかや本当に平和っていうものを望んで、そのためにあらゆる努力をしているすばらしい国だと思わせることができれば、それは国策としてとてもいいことだと思うんです。

ただ、それを本当に実行する方法、あるいはそれは時間とともにどれほど強固な方策であるのかということに対して自信がない。というのは今、尖閣の問題とか、竹島の問題とかが起こっていますけれども、あそこで中国や韓国と武力を使った衝突がたとえば起こったとすると、今もめている集団的自衛権の行使なんて、あっという間に通ると思うんです。つまり先ほど申し上げた主権国家の本能というものがあって、いざとなったら自分で自分の身を守らなければいけない。今はまだいざとなっていないわけです。だから75%の人も、「どんなことがあっても戦争はいけない」というきれいごとを言える。そういう立場に日米安保体制の中で日本は置かれてきた。だから、この75%が「イエス」と言っているわけですよ。

でも、中国との関係とか韓国との関係で衝突が起こり、何人かの日本人がそこで死んだとか、何かそういう事態が起こったときに、防衛本能というものが起こると、いや平和国家として徹底的に世界の平和のためにわれわれは尽くすのだとずっと言っている、それを維持できなくなる。そこの脆弱性をどういう方法で担保できるのかということが問題の根幹にあると思っ

ているのですが、古市さん、何かいいアイデアはありますか。

**【古市講師】** そこは確かに心もとないところだと思うの

です。ただし、尖閣問題に関して言えば、あと15年か20年たったら少子高齢化が進んでしまうので、中国も国力が弱ってくることは半ば確定的なわけですね。そうしたら今のような覇権主義をとることができないので、そういうことを考えると、この20年のうちに何も起こらなければ大丈夫じゃないかと思います。逆に言えば、この20年がすごい勝負というか、この期間は運に任せる要素が多い気がします。本当に今のこの状況は、確かに心もとないと思うのです。

しかも憲法9条は右派、左派両方のおかげで、非常に骨抜きにされてきてしまいましたよね。解釈がどんどん変えられて、憲法9条はどんどん骨抜きになってしまいました。ですので、憲法9条を守ることが平和を追求することかといったら、もはや非常に怪しくなっています。だから、憲法9条を守ることによって平和になろう、というアピールもなかなかできなくなっています。平和国家であることを確かにするすべを、日本はどんどんなくしてきてしまっているの、そこを強固なものにするのはすごく難しいと思うのです。

一方で、憲法を変えて普通の国になろうという議論もちょっとずれていると思います。というのは、75%の国民が戦争をしたくないという国で、憲法という文章だけを変えたところで、人々の心が急に変わるわけではないわけです。文章だけを変えて人々の心が変わるみたいなことを言う人もいますけれども、それはたぶん難しいだろうと思います。

ただし、国際関係に関して、ちゃんと手順を踏むということは大事だと思います。たとえば、日本は去年の夏に「イプシロン」という固体燃料ロケットを打ち上げましたけれども、あれは技術的にはどう見ても固体弾道燃料ミサイルと同じテクノロジーなのです。それをどこの国の人もちゃんと分かっているわけです。でも、そういうことを日本国内のメディアはあまり報じずに、ただあれを「打ち上げ成功」というふう



JAXAの関係者も、「あれは軍事目的ではなく単純なロケットである」ということを、中国や韓国に対してロビーイングするということは、あまりしていないらしいのです。だから、中国や韓国をむだに刺激をしないとか、むだなことをしないとということに関しては、もうちょっと気を払ってもいいかもしれないと思います。そういうレベルでできることはたくさんあると思います。ただ、全体として平和をどうやって確固たるものにしていくかということに関しては、すごく難しい状態にあるのではないかと思います。

**【中谷理事長】** 古市さんのきょうのご提案でもおもしろいのは、丸山眞男を初めとする自虐史観派と愛国派の対立で、その議論を深めて何か解決策を見いだすことはもう無理だからやめた方がいいと、こここのところはちゃんと達観すべきだと、そして日本の置かれた状況からすると、今余計なことはもうしないのだということをおっしゃいました。これはなかなかおもしろい考え方ですね。世界から見て、日本という国は確かにほかの国と違う、成熟した国だと思われるようになりたい、ということですね。そして少しずつでも紛争回避というか、たとえば中国が尖閣で余分なことしても、日本はいたずらに戦闘的な方向で、マッチョな元気のいい話を持っていくのではなくて、世界中から冷静に見て、「あ、日本の対応は本当に大人だね。そんなつまらない言いがかりに過剰に反応しないし、非常に大人だ。日本はすばらしい国だ」というふうに思わせるような対応をとれるよう、努めようというわけですね。

そのためにも、不毛なイデオロギー論争はもうやめて、そういう方向で国民の意識が高まっていけば少しは抑止力になるかもしれない、ということですね。

繰り返しになりますが、古市さんのご提案で一番おもしろかったのは、国論を二分しているイデオロギー論争を、これ以上やったら解決のしようがないから、そこはむしろ棚上げしてしまって、そのうえで何か築けるのではないかという提案でした。ただ、これだけでなかなか実現にはハードルが高い。もっともっと議論し、国民の意識を高めるためには何が必要なのか。いずれにしても、やらなければいけないことは山積みです。

**【太下】** ほかの皆さんはどうですか、何かご意見はありますか。

**【上野】** 上野裕子と申します。官公庁からの受託調査を手がけており、産業政策や科学技術政策を専門としております。

先ほどのお話の中で、歴史観が一致しなくても友好国になり得るということで、アメリカと日本の話があったんですけども、歴史観が一致しなくても友好国になるためには、個人的には歴史観が一致していないという事実を強調しないとか、覆い隠すとか、そういうところが必要なのではないかと感じています。

私自身アメリカの高校の教育を受けていることがあって、米国の教科書には、広島、長崎に原爆を落としたので、日本は諦めて戦争をやめましたと書かれているのはその通りなのですが、その事実を一般的に日本の人が知っているかという、そんなに広くみんなが知っているわけではない。逆に戦後ずっと流されてきたのは、『パパは何でも知っている』のような米国のよいホームドラマで、戦争している間は「鬼畜米英」だったのが、一夜にして「マッカーサー、格好いい」というふうになるように、ガラリと価値観の転換が起こるような、ちょっと悪い言い方をすると情報操作のようなことが行われて、国民の意識が変わって、アメ



上野氏

リカに対する歴史、現代史の部分をあまり教えてこなかったというところがあります。この背景には、もちろんいろいろあると思いますが、アメリカに対する敵国心をあおらないようにして、安保体制をみんなが認めるように持っていくというマスメディアの力、先ほどあまりないとおっしゃったんですがマスメディアの力や、メディアに限らず政府や教育等によるいろいろな場所での国民に対する情報の与え方というのがあったのではないかと考えています。

それを中国、韓国との今の関係に当てはめると、両国ともが事細かにいちいちなんでも報道して取り上げる、これがいけないのではないかと考えています。靖国神社に誰が参拝したとか、個人名で行ったのか、公職で行ったのか、玉串を個人のポケットマネーで払ったのか、税金で払ったのかと、いちいち細かいことがニュースとして報道されています。その報道の仕方新聞、ニュース、テレビだけではなくて、ツイッター、インターネット含めて、若い人から年を取った人までみんなが細かく知る。それを中国、韓国側も日本側も常に一挙手一投足取り上げてあおっている感じがします。両者の認識が違うということを知りつつも、それを強調しなかったアメリカと日本だから友好関係は築けたのであって、こうやって強調している限りなかなか友好関係を築くのは難しいように思います。マスメディアの影響、流れてくる情報の影響で、日本に限らず国民の感情や世論は、各国ともつくられるのではな

いかと思うのですけれども、いかがでしょうか。

**【古市講師】** 情報というものは、ある時代までは政府なりメディアなりから一元的に押しつけて与えることができたと思うのです。たとえば、軍事政権下の韓国はまさにそうだったと思うのです。実際、日韓で条約を結び、韓国の軍事政権もそれを納得して、ある種日本のバッシングを抑えていた時期もあります。

一方で、日本国内でも、インターネットがここまで発達する以前までは、いわゆる「自虐史観」と言われる歴史を学校で教えたところで、大騒ぎにはならなかった。メディアもそれを当たり前のように流していました。そして、それで別に問題がなかった時代もあるわけです。

でも、今はそうはいかないですね。メディアが伝えなくても、政権が伝えなくても、どこかから漏れてしまうのです。ツイッターもあるし、ソーシャルメディアもあります。それは韓国、日本、中国、どこの国も同じ状況だと思うのです。情報がコントロールできなくなっているのです。そして、日本で今ややいびつな形ではありますが、学校で教えてくれなかったけれども、実はこうだったんだ、日本はこんないいことをして、逆に韓国、中国がこんなに悪かったみたいなことが、ネット右翼と呼ばれる人たちによって叫ばれている状況があるわけです。そういうことを考えると、過剰に上から一元的に細かいことを伝えないということに関しては、ある時代までは有効だったけれども、もはやそれは難しいのではないかと、思います。

**【太下】** ほかにどなたかいらっしゃいますか。他になければ私も質問したいことがあるのです。

実は私もベルリンに列置している、ある種の戦争博物館である「ユダヤ博物館」が大変好きで、ベルリンに行くたびに寄っているのです。また、私自身は文化政策を専門にしていますので、ミュージアムと世界の事象の関係は非常に興味深いテーマだと考えています。先ほど中谷理事長からもお話がありましたように、ミュージアムというものが西欧文明を固定化するとい



う社会的機能なのだという考え方にも、なるほどと感じています。

一方で、私が専門にしているアートの世界で言うと逆のことが起こりつつあります。どういうことかという、ある思想的体系のもとに収集されたコレクション、その価値体系としてのミュージアムというものが確立されてきたわけですが、今は逆にそれがほどけていって、そういったアートというものがフィールドに還元されていき、そして個人やコミュニティと歴史的事象との関係が再編集されている、こういったことが今起こってきているように思うのです。

たとえば、ヨーロッパで実施されているアートイベントで、「欧州文化首都」という事業があります。これは毎年、ここが欧州の文化首都だということで、その都市で1年間さまざまな文化事業が行われる、ヨーロッパでも最大規模の文化イベントです。そして、この欧州文化首都が開催された都市の中で、やはり戦争というテーマが取り上げられるわけです。今日は2つ事例を紹介したいと思います。

ひとつは、オーストリアのリンツで行われた2009年の欧州文化首都です。実は本日の講義にも登場したヒトラーは、このリンツの近郊で生まれたのです。そして第二次世界大戦中には、このリンツという町を舞台にナチスがさまざまな事件を起こしています。ただし、現在のリンツの住民は、ある意味日本人と非常に近いのかもしれないのですが、当時の事件のことをあまり振り返らないで、どちらかというのを忘れたというスタンスを持っているわけです。

そうした状況にあって、この戦争の記憶をアートとして取り上げたプロジェクトがあって、そのタイトルは「イン・サイチュ」で、これは現場という意味なのです。このプロジェクトでは、かつてナチスがいろいろな事件を起こした現場ごとに、白墨のような筆記具で、いつ何が起こったのかという事実を書くのです。それが道路上で起こったことであれば、実際の道路上に書くわけです。また、ある家で起こったら、その家の人の



太下氏

許可を得て家の壁に書くわけです。

このプロジェクトのポイントは、それが白墨みたいなもので書かれているということです。なぜそういうもので書くのか。プロジェクトを開始したときはきれいに書かれて判読できる文字が、雨や風、または道路だと車や人が通ったりすることによって、どんどん薄れて消えていってしまうのです。要するに、かつてある事件が起こったけれども、それは私たちの記憶の中からどんどん風化して消えていくということ、それ自体をアートのコンセプトにしている作品なのです。このプロジェクトを見た人は、見るタイミングにもよりますが、消えかけている歴史的事実を見て、同時に自分の中で消えかけている歴史事実とパラレルな関係にあることを再認識する、という構造を持っているのです。

もうひとつの事例をご紹介します。ドイツのルール地方のエッセンという街で行われた2010年の「欧州文化首都」の事例です。このエッセンの街に Folkwang Museum という非常にきれいなミュージアムがありますが、この美術館で「世界で一番美しい美術館」という展覧会が行われたのです。なんで「世界で一番美しい」というタイトルにしたのでしょうか。実はこの Folkwang Museum はとても歴史のあるミュージアムなのですが、かつて持っていたコレクションの大半をナチスに売り払われてしまったのです。

古市さんもご存じかと思いますが、ナチス・ドイツはかなり強力な文化統制を行いました。いわゆるドイツ的なもの、アーリア的なものについては非常に賛美した一方で、前衛的な表現であるとか、自分たちの感性に合わない美術品については「退廃芸術」という烙印を押して、徹底的に排除していったのです。ベルリンのミュージアムでは「退廃芸術展」というタイトルの展覧会が開催されて、一定期間展覧会を開催した後は、作品を中央の広場に運び出して、それらを全部燃やしたということもありました。

そういった意味では、フォルクヴァング・ミュージアムのケースはある意味でラッキーだったのですけれど、コレクションは燃やされずに、ナチス・ドイツの軍資金にするために売り払われたのです。こうした歴史を有するミュージアムで、21世紀になり、「欧州文化首都」を開催したときに、世界中に散逸したコレクションをもう一回借りてきて、かつてナチス・ドイツがコレクションを売り払ってしまう前のミュージアムのコレクション展を再現したわけです。これはもちろんテンポラリーなもので、コレクションはまたすぐになくなってしまいうわけです。だけど、そういうふうに展開会を開催した後にコレクションがなくなってしまうという行為を通じて、エッセン、そしてルール地方の人たちは、かつてそこで何が起こったのかということをやや応なく認識し続けなければいけないわけです。

こういう事例から理解できる通り、現代アートの分野では、かつてのミュージアムとは異なる、新しい形で人々の記憶に問いかけるような試みが起こってきているのです。ミュージアムの機能は終わったのではないかと、という議論もありますが、ある意味ではそうかなとも思いつつ、アートの世界では新たに違う動きが起こってきているのだということをお伝えしたいと思いました。古市さんから何かコメントがあればぜひお聞きしたいと思います。

**【古市講師】** ありがとうございました。確かに戦争とい

うものは、場所や箱モノに縛られる必要はないのかなと思いました。日本の場合、残念ながら戦争そのものの記憶を残せる場所は、広島原爆ドームを除いてあまり存在しないのですけれども。そこで日本では、戦争の記憶を一回全部壊してしまって、後からそれを埋め合わせるように箱モノをばんばん建てたという歴史があります。しかし、箱モノは結局古びていくわけです。こうした状況において、必ずしもミュージアムという箱モノや場所にこだわらないで、できることはまだまだあるのかなという気はします。たとえば、その場所に縛られないようなデジタルアーカイブの形でいいし、街中の戦跡を何かつなぐようなARのアプリでもいいかもしれないですね。戦争は日本国中でどこでも起こったことですから、そういう形でかつての箱モノではないものとして、再構築できる可能性はあるのではないかと話を聞きながら思っていました。

**【太下】** ほかに何かご質問ありますか。よろしいでしょうか。では、もう時間をだいぶオーバーしているので、本日はこれで終わりにしたいと思います。最後に古市さんに、拍手をお願いいたします。(拍手)